

(別紙5)

整理番号 2024P-152
補助事業名 2024年度 ジェンダー平等の実現に向けた支援活動 補助事業
補助事業者名 (一社) カルティベータ

1 補助事業の概要

(1) 事業の目的

スポーツ関係者を対象にセミナー等を実施し、スポーツ界におけるジェンダー平等を目的とし、もって社会福祉の増進に寄与する。

(2) 実施内容

カルティベータのウェブ上で発表

第1回 <https://thecultivator.jp/content/2024/07/27/3317/>

第2回 <https://thecultivator.jp/content/2024/11/11/3483/>

第3回 <https://thecultivator.jp/seminar/2025/04/01/3722/>

2 予想される事業実施効果

スポーツ関連団体役員の女性比率のアップ、女性スポーツの実施率等スポーツ界における男女共同参画面での効果が期待できる。

参加者や記事を目にした人々の心のバリアーは払拭されていると思われる。

3 補助事業に係る成果物

(1) 補助事業により作成したもの

第一回パンフレット

CULTIVATOR

女性スポーツ勉強会 #19 表現するスポーツを考える



渋谷区神宮前 5-53-67 (表参道駅 B2 から徒歩 7 分)

7月6日(土) 13:30~16:50

対面とオンライン / 詳細とお申込みはこちらから⇒



橋爪みすず
新体操指導者
日女体大教授



須永美歌子
女性スポーツ研究者
日体大教授



野口美恵
フィギュアスケート
担当記者



置塩正剛
弁護士



鱈川せりな
アスリート
フードマイスター



宮嶋泰子
スポーツ文化
ジャーナリスト



この事業は公益財団法人
JKA の公益補助事業として行われます。



集合とオンラインのハイブリッド
<https://thecultivator.jp/>

CULTIVATOR



小谷実可子さん (こたに・みかこ)

「世界マスターズ挑戦を通して肌で感じた“ジェンダーイクオリティ&インクルージョン”

1966年生まれ 57歳 1988年のソウル五輪にてシンクロナイズドスイミング・デュエットで銅メダルを獲得。長野五輪招致活動、東京五輪招致アンバサダーなどを務める。2023年世界マスターズ・アーティスティックスイミング・デュエット金メダル。2024年世界マスターズではミックスデュエットで金メダルを獲得。



伊藤みどりさん (いとう・みどり) 「フィギュアスケートアダルト大会を目指して得られたこと」

1969年生まれ 54歳 世界女子で初めてトリプルアクセルを成功させたフィギュアスケーター。1998年世界女王、1992年アルペールビル五輪銀メダリスト。全日本選手権8連覇。2011年から国際アダルト競技会に参加し、滑る喜びと幸せを世界に伝え続けている。



橋爪みすずさん (はしづめ・みすず) 「新体操の指導と体重コントロール」

新体操指導者、日本体協協会副会長、日本女子体育大学教授、長野県の伊那西高校の教員として新体操部を指導し2015年全国高校選抜とインターハイで団体、個人優勝を果たす。2012年から指導の現場に栄養とコンディショニングの専門的サポートを導入し、選手の心身の健康を重視する指導を継続。



須永美歌子さん (すなが・みかこ) 「女性アスリートの体重制限と無月経、その影響」

女子アスリート研究の専門家。日本体育大学教授、博士(医学)。運動時生理反応の男女差や月経周期の影響を考慮し、女性のための効率的なコンディショニング法やトレーニングプログラムの開発を目指して研究に取り組んでいる。トレーニング科学の見地からトップアスリートやコーチへの指導も多数。著書に「女性アスリートの教科書」(主婦の友社)。



野口美恵さん (のぐち・よしえ) 「フィギュアスケートアダルト大会を目指して得られたこと」

元毎日新聞記者。フィギュアスケートを中心としたスポーツライターとして「Sports Graphic Number」「AERA」などに寄稿している。また、2009年に日本人として初めて国際アダルトフィギュア競技会に参加し、スケーターとしても活動中。2024年は伊藤みどりさんと一緒に大会に向かいサポートも行った。



置塩正剛さん (おきしお・せいこう)

「トランスジェンダー、DSDsアスリートの競技参加についての世界情勢」

弁護士 くくな法律事務所、東京弁護士会所属。弁護士として、精力的にアスリート個人やスポーツ団体をサポートしているほか、自分自身もマスターズ陸上で100mを中心に競技を続けている。また、外部指導者として中学生に陸上競技の楽しさを伝えている。共著「ハラスメント事件の弁護士実務」(第一法規出版)。



鯉川せりなさん (わにがわ・せりな) 「実可子さん、みどりさん、新体操選手へのお弁当」

アスリートフードマイスター。四兄弟を育てる肝っ玉母さん。野球選手を夢見た男性と結婚後、子供たちのためにスポーツのための食事を勉強。現在はジュニア育成組織や地域スポーツチームにて栄養アドバイザーを務める。



宮嶋泰子 (みやじま・やすこ) 「時代はマスターズ 誰でもが楽しめるウェルビーイングを目指して」

スポーツ文化ジャーナリスト、(一社)カルティベータ代表理事。テレビ朝日にてアナウンサー、ディレクター、プロデューサーとして43年間スポーツとかわる。五輪現地取材19回。パラリンピック番組も1992年より制作。ニュースステーション、報道ステーションでスポーツドキュメンタリー特集を430本制作。日本オリンピック委員会2016年度女性スポーツ賞受賞。



この事業は公益財団法人
JKAの公益補助事業として行われます。



集合とオンラインのハイブリッド ■ お申し込みはこちらから
<https://thecultivator.jp/>



第二回パンフレット

カルティベータ・セミナー
女性スポーツ勉強会 #20

2024年11月2日(土) 開場13:00
開始13:30~16:50
東京ウィメンズプラザ 集合とオンラインのハイブリッド
(地下鉄表参道駅から徒歩7分)

「日本の社会・女性・身体」



上野千鶴子先生

(東京大学名誉教授)

日本のジェンダー研究第一人者

「日本の女性はなぜ生きづらいか？」



福永哲夫先生

(元鹿屋体育大学学長)

日本の筋肉研究の第一人者

「中高年になってからの筋力」



高尾美穂医師：産婦人科医で

ヨガ指導も行う第一人者

「これから気にしておきたい

からだの不調と対策」



宮嶋泰子

スポーツ文化ジャーナリスト

ファシリテーター



この事業は公益財団法人 JKA の公益補助事業として行われます。 ■ お申し込みはこちらから



第三回パンフレット

女性スポーツ勉強会 #21
カルティベータ・セミナー

2025年3月8日 国際女性デー

2025年3月8日(土) 開場13:15

時間：13:45～17:45

場所：東京ウィメンズプラザ
表参道駅から徒歩7分



山口 香

女が女の
スポーツを
考える



井村 雅代



内村 周子



高尾 美穂



山下佐知子



井本直歩子



稲澤 裕子



宮嶋 泰子



この事業は公益財団法人 JKA の
公益補助事業として行われます。



お申し込みはこちらから、対面またはオンラインが選べます。
JSPO 公認指導者資格更新講座



カルティベータ・セミナー / 登壇者プロフィール



山口 香さん

ソウル五輪女子柔道銅メダリスト。13歳で全日本女子体重別選手権大会で優勝して以来10連覇。世界選手権でも数々のメダルを獲得。「女三四郎」と呼ばれ女子柔道の第一人者として活躍する。現在は、筑波大学で教鞭を執る傍ら、後進の指導にあたる。今回は、男子の柔道選手の中で育ってきたご自身の経験から女子の柔道と男子の柔道の違いなどをお話いただく。



井村 雅代さん

公益社団法人井村アーティスティックスイミングクラブ 代表理事。シンクロナイズドスイミングが五輪正式競技となった1984年から日本を率い、日本のシンクロナイズドスイミングの基礎を作り、世界で戦える選手の育成を行ってきた。中国、英国、スペイン、イタリアなどでも指導。その実績と功績により、令和4年春の叙勲「旭日双光章」を受章。今回は、長年女性のアスリートを指導してきた経験から、日本と諸外国の女子選手の違いなどについて語っていただく。



高尾 美穂さん

女性のための統合ヘルスクリニック「イク表参道」副院長。働く女性の産業医として内閣府男女共同参画局・人事局などで職員研修を担当。長年ヨガを愛好し、多くのヨガインストラクターを指導。YouTube「高尾美穂からのリアルボイス」では毎日、女性のお悩みに答え、案に生きられる考え方を配信している。今回は、それぞれの登壇者のお話を受けて、ファシリテーター宮嶋泰子と共に医師の立場から、女性のスポーツについてのコメントをいただく。



内村 周子さん

日本の体操指導者であり、内村航平選手の母。長崎純心女子学園（現・長崎県立大学）卒業後、体操教室で幼児体育の指導にあたる。1992年に夫久氏と共にスポーツクラブ内村を開設。2歳から大人までの体操指導を行うとともに、Shuバレエスタジオにてクラシックバレエ教師としても活動。現在は東京でも二つの教室（渋谷と有明）で指導を行っている。2024年長崎純心大学大学院を卒業し修士号を取得。子供たちを指導している中で、身体活動をする中で、女子は男子と比較して何か違いがあるのかなどを伝えていただく。また、ご自身でバレエやマスターズ体操を今でも続けている理由もうかがう。



山下 佐知子さん

1987年鳥取大学卒業後、京セラ（株）でマラソン選手として世界選手権銀メダル、オリンピック4位入賞など活躍。1996年に第一生命女子陸上競技部監督となり、2001年から日本陸上競技連盟で初の女性理事となる。女性監督初の全日本実業団女子駅伝優勝や、ロンドン、リオ五輪に選手を送り出し、東京五輪の女子マラソンオリンピック強化コーチとなる。パリ五輪では鈴木優花選手が女子マラソン 決勝6位に入賞。指導者としてトップを走り続けて感じる女子選手の育成についてうかがう。



稲澤 裕子さん

昭和女子大学現代ビジネス研究所特別研究員・元特命教授広報担当参事。読売新聞東京本社で記者、女性向けサイト「大手小町」編集長を経て調査研究本部主任研究員在籍中の2013年、公益財団法人日本ラグビーフットボール協会初の女性理事に就任。2021年6月から同協会評議員、一般社団法人ジャパンラグビーリーグワン理事（～現任）。今回は、日本国内の競技団体における女性役員比率の変化によって、何がどう変わってきたのかを伝えていただく。



井本 直歩子さん

元競泳日本代表。'94年広島アジア大会金メダリスト（50m自由形、4x100mリレー金）、'96年アトランタ五輪4x200mリレー4位。競技引退後、マンチェスター大学大学院にて貧困・紛争・戦後復興の修士号を取得し、以来国際協力機構（JICA）、国連児童基金（ユニセフ）で、約20年間発展途上国の平和構築・教育支援に従事。現在は大学院で気候変動教育を研究しながら、一般社団法人SDGs in Sports 代表として、スポーツ界の環境・気候変動対策およびジェンダー平等推進のために学びの場を創出している。今回は日本国内の競技団体における女性役員比率について報告をしていただく。



宮嶋 泰子

スポーツ文化ジャーナリスト。（一社）カルティベータ代表理事。（公財）かめり財団理事長。テレビ朝日にてニュースステーション、報道ステーションで40年以上にわたりスポーツ番組制作を行う。1980年のモスクワ大会から19回の夏冬の五輪を現地取材。文部科学省中央教育審議会青少年スポーツ分科会や政策評価委員会のメンバーを長年務める。2016年日本オリンピック委員会女性スポーツ賞受賞。今回はファシリテーターを務める。



この事業は公益財団法人 JKA の
公益補助事業として行われます。



お申し込みはこちらから、対面またはオンラインが選べます。
JSPO 公認指導者資格更新講座



2) (1) 以外で当事業において作成したもの



カルティベータ*5周年記念・女性スポーツ勉強会#21
REPORT 「女が女のスポーツを考える」

日本のスポーツ界では、「女性のスポーツ」についての研究や理解が遅れており、多くの課題や改善すべき点がある。

スポーツは、人間の心と体の健康を維持・推進する大切な分野だが、男性中心の歴史があるため、オリンピック委員会や競技団体では女性理事不在の時期もあった。女性アスリートの人生や健康に配慮しない指導法が行われた頃もあった。2014年から息長く勉強会の開催を継続してきた宮嶋さんが、5周年記念の勉強会をレポート。新時代の「女性のスポーツ」を考えてみよう！

REPORT 宮嶋泰子
 スポーツ文化ジャーナリスト
 (一社)カルティベータ代表理事



*カルティベータは絆ず人という意味。一般社団法人カルティベータはよりよく生きるための基礎作りをするために設立された。代表理事の高橋泰子さんは、テレビ朝日のアナウンサーであった2014年から女性のスポーツに貢献。勉強会を企画しスタートして今回が21回目となる。

カルティベータ5周年を記念する21回目の勉強会は、3月8日に、東京青山のウイメンズクラブで開催された。SNSの投稿で、あるラグビーの指導者がつぶやいていた。「初めて女子を指導して面食らった。ボールの投げ方が男子と全く違うのだ」この言葉をきっかけに、徹底的に女性のスポーツの特徴は男子とどう違うのか話し合ってみよう。そんな思いで「カルティベータの5周年を記念する女性スポーツ勉強会#21・女が女のスポーツを考える」が実現した。

登壇者は柔道の山口香さん、アーティスティックスイミングの井村雅代さん、産婦人科医の高尾美穂さん、女子長距離指導者の山下佐知子さん、内村航平さんの母である内村周子さん、そして、競泳オリンピック井本直歩子さん、元昭和女子大特命教授広報担当参事の稲澤裕子さん、ファシリテーターは私、宮嶋泰子という布陣。

パート1 統括団体に女性理事が増え不正を防ぐ体制がきき会議が活発化
 国内競技団体の女性理事につ

いて、競泳のオリンピック井本直歩子さんと元昭和女子大特命教授広報担当参事の稲澤裕子さんが登壇。自ら国内競技団体理事を務める二人だ。東京オリパラを前にした2019年に、スポーツ庁がガバナンスコードを制定し、中央競技団体においては理事の4割は女性にするように目標割合が提示された。達成できない時にはペナルティとして助成金が保留となることが示され、日本オリンピック委員会や日本スポーツ協会等の統括団体では女性理事は4割を超えた。女性理事や外部理事が増えたことで、不正を防ぐ体制ができたように、会議が活性化してきたように感じると当事者としての感想も述べられた。しかし、地方に目を向けると、まだまだ女性理事や女性指導者が不足しており、会議においては男性中心主義が残っていることも事実だ。

パート2 女子柔道競技スタート時選手自ら監督と細部まで交渉し話を進めた
 女三四郎という異名をとり、中学生の時に初段をとった山口香さんが登壇。女子の試合が行われる

ようになった時期の草分け的存在だけに、一から十まで自分で監督と交渉しながら話を進めざるを得なかったことが語られ、いかに指導者と話を進めていくことが大切かが語られた。

パート3 ルール変更で男子も競技に参入
 男女身体差を考えた指導方法に
 アーティスティックスイミングは男子も出場できるようにルールが変わり、井村雅代さんもつい先ごろまでドイツで男子選手を指導してきたという。浮くために手で水をかく基本動作、スカールリング一つをとってみても、男子は腕の筋肉が多いため、女子と同じような動作ができず、筋肉量が多い分沈みがちになるので、男子のためのスカールリングを考える必要があったという話は興味深かった。男女の身体の作りの違いによって、同じことをする動作も違ってくるのだ。井村さんの講演後、教える子である二村知子さんからどれだけ井村さんが面倒を見てくれたかが語られ、どんなプスレがちな井村さんの隠された一面が披露された。



山口 香さん



井村 雅代さん

パート4
中学女子の3分の1は一週間に60分の身体活動もしていない!

女子長距離の5人の選手をオリンピックに送り出した女性指導者、山下佐知子さんと、体操競技の内村航平さんの母、周子さんも交えて、全員でのトーク。日本の女子スポーツや身体活動が抱える問題点が議論された。

まず、前提として示されたのが、日本の中学女子の約三分の一が一週間に60分も身体活動をしていないという現実だった。痩せていながら体脂肪が30%以上あるという若い女性も増えているという。どうすればもっと身体活動を活発に行うようになるのかが問われた。60歳を過ぎてても体操競技やバレエを行い、子供たちを指導している内村周子さんからの「楽しい」という気持ち、それが一番大切。だから長く続けられる」との言葉が全てだろう。学校体育の指導が再考される必要性は大きい。デイスカッションから「環境」「身体」「人生」の3つのテーマに分けて進められた。

■テーマ「環境」

日本のテレビでは圧倒的に男性

スポーツが中心で、女子の競技は露出が少ない。パリオリンピックでは男女の競技が同等に露出するように放送計画が作られたという。英国では近年、「男女のスポーツを公平に扱い、敬意ある報道を心掛けるよう」に変わってきており、その結果、女子スポーツへの関心が高まっているという。日本の放送局や各メディアにはまだその意識が不足している。

また米国には、50年前に制定された連邦法のタイトルナインがあり、公的高等教育機関においては性差別が禁止されて、男女同等の練習環境や奨学金が与えられている。これによって大学アスリートの女子の割合は28%から44%までに上昇。一方、日本の大学スポーツはまだまだ六大学の野球や駅伝など男性スポーツが中心だ。

■テーマ「身体」

男性と女性では身体の作りが異なり、筋肉量も骨の太さも違う。当然、同じ競技であってもスキルが異なってくる。女性の骨盤は男性に比べて横に広がっており、そのためにX脚になりがちだ。膝が内側に入り、足首が外側に曲がる

性よりも多くなる。予防のための準備運動などもあるので、知識を持ち、しっかり対処すべきだろう。また、女性の首の骨、頸骨は男性よりも細い。サッカーのヘディングにより脳震盪をたびたび起こし、生活に支障をきたす選手もいる。ヘディングそのものや、男女が同じボールでよいのかも検討の余地があるのではないかとこの問題提起もあった。

トップレベルでは数少ない女性指導者である山下佐知子さんから、生理や痛みなどについても細かく話し合っておりトレーニングを進めていくことが示された。女子では骨盤の広さの差ゆえか、腕振りや肘を張る傾向があるように感じるとの言葉が印象的だった。

月経周期で排卵期には靱帯が緩みやすく怪我をしやすいくとも直近のデータで示され、今後はこうした点を選手自身も指導者も意識しながらのトレーニングが必ず必要になってくるだろう。

■テーマ「人生」

女子のアスリートや指導者にとつてのライフイベントは山あり谷ありだが、結婚出産などの経験を互いに分かちあえる団体の存在が

あることの確認が行われた。

8人の登壇者によるシボリズムの締めとして、多様性のダイバシティと、公平にするエクイティ、そして包摂するインクルージョンの必要性を画像で説明し、最後に、スポーツ社会学の第一人者である菊幸筑波大学名誉教授からまとめの言葉をいただいた。近代の工業化社会で大きなエネルギーを持っている男性を中心とする神話が生まれ、スポーツそのものが男性スポーツとして生まれてきたので、女性はそれに縛られ強いられる。今後は公平なものにしていくプロセスが必要で、そのためにはルールを変えていく作業が必要だろうとのまとめられた。

今回は男女の違いをキーワードに、スポーツを横断的に考えてみたが、実に多くのことが分かった4時間だった。女子のスポーツには改善点が山ほどあり、より多くの人々が楽しめるようにするには、組織的にも、ルールのにも、指導者やスポーツを行う者の知識も意識も変革していく必要があることが強く感じられた。

今回は7月5日(土)に同じく表参道の東京ウィメンズプラザで行われる予定だ。

スポーツ カルティベータ5周年イベント

「女が女のスポーツを考える」

スポーツや文化を通し、「豊かな人生の道しるべをつくる」ことを目的に立ち上げられた一般社団法人カルティベータの5周年記念特別イベント「女が女のスポーツを考える」が国際女性デーの3月8日、東京ウィメンズプラザで開かれた。イベントには柔道メダリストで筑波大学教授の山口香さん、アーティスティックスイミング・コーチの井村雅代さんと、そうそうたるメンバーが議論を交わした。

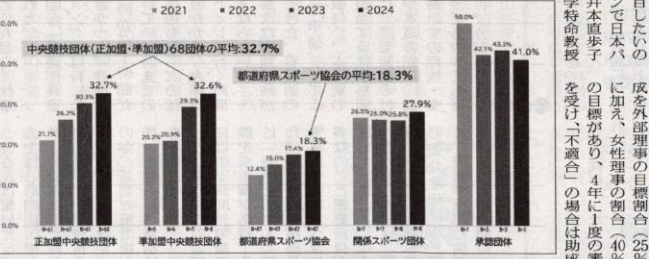


↑イベントで議論を交わすパネリストら。©カルティベータ主催女性スポーツ勉強会 #21 女が女のスポーツを考える

「国内競技団体(NFF)に女性役員が増えて何が変わってきたのか。日本における改革がIOC(国際オリンピック委員会)の指針「ジェンダー平等プロジェクト」25の提言に沿ったものであることを紹介。組織の意思決定層に多様性が必要である理由について、①社会の課題に対して盲点が生じ

競技団体に女性役員が増えて何が変わったか
はじめに、カルティベータ代表理事を務めるスポーツ文化ジャーナリストの宮嶋泰子さんがあいさつに立ち、自身の五輪、パラリンピックの取材経験を軸とした団体設立の思いと活動の軌跡について紹介した。女性スポーツについては、ボールの投げ方を例に「女性は男性とは体の動きがまったく異なる」ことに着目し、指導のあり方への疑問が発表のきっかけとなった。

スポーツ団体に占める女性役員の比率



やすい②黄金の3割(クワリテール・マゾ)理論(組織において3割の属性があり、多数派の存在に達しない場合、多数派の属性が変わらない)③リーダーシップ集団(浅慮)④同調圧力によって、断能力が損なわれる⑤解説「ジェンダー平等で多様な性ある議論」

井本さんは、自身の理事就任がパドミン協会の不祥事後の徹底した組織改革のさなかのことだったとして、「理事会においては女性の発言の方が多く、忖度(そんたく)のない素朴な疑問と意見が飛び交った」と話した。また井本さんは「女性が私一人の時は、私が女性を代表する形になってしまったが、女性が理する」と、それぞれの専門分野からの発言となり、多様性と発展性のある議論になったと述べた。

「ジェンダー平等で多様な性ある議論」
次に井本さんは、2019年日本で制定されたスポーツ団体パナスコッド(行動原則)を成を外部理事の目標割合(25%)に加え、女性理事の割合(40%)の目標があり、4年に1度の審を受け「不適合」の場合は助成

遅れる意思決定ポストへの女性進出

しかし女性理事が増えたとはいえ、会長・副会長、専務・常務理事という意思決定ポストにおいては、女性は非常に少ない現状にある。井本さんは「指導者や競技者の育成はもうんだが、組織運営などで女性の育成が必要になってくる」と述べ、自身の「女性リーダー

泊原発 「審査をやり直すべき8つの理由」

泊原発の再稼働を問う原子力規制委員会の審査が大詰めを迎えた4月26日、原子力資料情報室は、北海道大学名誉教授の小野有五さんを招き、連続ウェビナー「福島第一原発事故14年」の第3回「知っていましたか? いま泊原発の審査をやり直すべき8つの理由」を開いた。タイトルは、小野さん自身が作成したパンフレットのタイトルから来ている。

冒頭、小野さんと共同で調査を行っている「行動する市民科学者の会・北海道」の斉藤海三郎さんが、12年という長期にわたった審査の経過について解説。斉藤さんは、積丹半島の隆起が地震性かどうかなどの議論を紹介。「隆起の地震性の否定や活断層の存在を認めないという北海道電力の主張は、規制委の現地調査によって覆された。しかし驚くべきことに、2021年の審査で規制委が北電の主張を認めた」と述べた。

続いて小野有五さんは、「審査をやり直すべき理由」として、①原子炉以外の重要施設のほとんどが海を埋め立てて建設されており、地震時の不等沈下、液状化の可能性がある。近くを通る断層は12.5万年以降の活動が否定できない活断層②能登半島地震で起きた活断層の連動性を認めていない。活断層の中心を原発から離れた場所に設定。想定する地震の大きさを低く見積もる③活断層の認定を規制委自ら翻し、上層地層法を持ち出した北電の「ねつ造」を追認④2号炉の直下にある断層の調査をしていない⑤3号炉の直近の断層も調査不十分⑥北電が呼称する「岩内層」は100万年前に一律にできたものではなく、12.5万年前、20万年前、33万年前の3回の海進(海面が陸地に比べて上昇)による層があるなどと審査の問題点を指摘した。

小野さんは、「北電の主張は12年前と何も変わっておらず、活断層の否定のみ。都合の悪い調査、論文を認めず、隠ぺいする。これを規制委が認めればどこにも科学はない」と強調した。4月28日、国は「長期脱炭素電源オークション」において泊3号機の安全対策費などで支援することを決定。同30日には原子力規制委員会が泊原発3号機について再稼働に向けた安全対策が新規基準に適合することを認める審査書案を了承した。今月末までパブリックコメント(市民からの意見募集)を受け付けている。

「スポーツネットワーク」の取り組みを紹介した。そして今後、ガバナンスにおけるジェンダー平等に向けては、①組織トップからの強いメッセージと関与の必要性②競技団体間のつながり強化と協働③先進事例の情報共有④リーダーになる人材を育てる⑤出席などに関して、女性も働きやすいスポーツ界をつくる⑥必要に応じて宮嶋さんなどの発表を受けて宮嶋さんはいないのだからと思っという語りで、若い時から意識をくわけていくことも必要ではないか」と述べた。



(別紙5)

4 事業内容についての問い合わせ先

団 体 名 : 一般社団法人カルティベータ
(イッパンシャダンハウジンカルティベータ)

住 所 : 〒106-0011
東京都港区芝公園2-6-8日本女子会館

M a i l : cultivatorjapan@gmail.com

U R L : <https://thecultivator.jp/>